

使わずに、たとえばロータリー奨学金であるいは私費でドイツに留学した学生も多い。

## 五 大学院

一九六六（昭和四十二）年に大学院外国語学研究科修士課程が設置された。それまでドイツ語学、ドイツ文学などを専攻しようとする学生は、他大学の大学院に進学しなければならなかったが、これにより本学での大学院進学が可能になった。ドイツ語学・文学の学生はゲルマン系言語専攻に所属することになる。ゲルマン系言語専攻の学生定員は、英語専攻と合せて一〇名であるが、ドイツ語専攻はそのうち四名となっていた。しかし、定員をオーバーしてとすることは可能であり、九二年までの修了者は八五名である。七七年には、大学院地域研究科修士課程が設置され、ドイツ史などを専攻する学生にも、本学での大学院進学が可能になった。ただし、地域研究研究科では、専攻語による区別がないため、ドイツ語という区分はない。これにより本学大学院に外国語学と地域研究の二本柱ができたわけである。

しかし、時が経つとともに、本学で博士課程がないことの不便さが顕著になり、九二年、これまでの外国語学研究科と地域研究研究科が、アジア・アフリカ言語文化研究所の参加のもとに、一本化され、大学院地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置され、本学での博士号取得が可能になった。ドイツ語関係の学生は、前期課程（修士課程）の場合、ヨーロッパ第一専攻言語文化コースあるいは地域研究コースのいずれかに所属し、後期課程（博士課程）の場合、地域文化専攻に所属する。なお、ドイツ語およびドイツとの関わりで幅広く研究しようとする学生には前期課程国際交流専修コースへの道もあるが、ドイツ語関係でこのコースへの進学者は少ない。

「DER KEIM」

本学外国語学研究所および地域研究研究所の院生のための雑誌「DER KEIM」が一九七七（昭和五十二）年に野村滋の指導の下、院生江原吉博が中心になって創刊された。野村の退官後は、平野篤司に引き継がれ、一度合併号もあるが、昨年、第二一号が発行された。院生の会費、先輩諸氏の寄付金、夏季セミナーでの収益金、執筆者の負担金などでまかなわれている。博士後期課程ができてからは、後期課程の学生も執筆するようになった。現在は成田節も加わり、質の向上に努めている。野村が在任中、野村の提供するワインなどを傾けながら行う、時には激論になったこともある合評会は楽しい思い出である。なお、収録された論文数は一一五本、研究ノート三本に及ぶ。六六年に設置され、歴史の浅い、「コネ」のない本学大学院の卒業生が就職の口を探すためには、論文を書く以外に道はなく、「DER KEIM」はそのための唯一の可能性と言えるものであった。「DER KEIM」での論文を通して、幾人もの学生が職を得ている。この点でも、野村の功績はきわめて大きいと言える。大学院が改組されるにあたり、本学の院生全体のための雑誌「言語文化」が創刊され、「DER KEIM」の廃刊も一時話題にのぼったが、ドイツ語関連のみの雑誌があることのメリットが大であるとの理由で、「DER KEIM」の存続が決まった。

六 学生の活動と進路

語劇

一八九七（明治三十）年の創立以来、一九〇八（明治四十一）年から一九一九（大正八）年までの間と太平洋戦争を挟んだ一九三七（昭和十二）年から四六年の時期を除いて、ほとんど毎年、語劇大会（あるいは語劇祭）が開催さ